

No.29

損保ジャパン東郷青児美術館

NEWS

SEIJI TOGO MEMORIAL
SOMPO JAPAN MUSEUM OF ART



東郷青児美術館大賞25周年記念 25人の絵画展

2003年4月26日(土)～6月29日(日)

東郷青児美術館大賞25周年記念 25人の絵画展

2003年4月26日〈土〉～6月29日〈日〉

東郷青児美術館大賞は、1976年に設立されて以後現在まで、毎年一人の受賞者を選出し、1991年からは回顧展形式による受賞者の個展を開催してきた。昨年をもって受賞者が25名に達したのを機に、全員の受賞当時の作品と近作ならびに新作の69点を集め、賞の歩みと受賞者の活動を紹介する展覧会を開催する。

東郷青児(1897-1978)は、20世紀初頭のパリで前衛美術の洗礼を受けた後、時代の空気をとりいれたモダンな女性像を創りだし、戦後二科会のリーダーとして美術の普及と海外交流につとめた。東郷の絵画を宣伝イメージに用いた安田火災現損保ジャパンは、1976年に新社屋が完成した際、東郷からの作品寄贈によって東郷青児美術館を設立した。翌年、同名の大賞もまた、美術館事業のひとつとして創設された。選考に際しては、30名前後の美術関係者から1年以内に発表された絵画作品の推薦を募り、その中から選考委員が受賞を決定する。初回の選考には東郷自身も加わり、「感覚の新鮮さ」「技法の確かさ」「独自の世界の形成」という選考基準は、「作家の国籍や具象・抽象の別なくすべてを対象とする」ことを望んだ東郷の意向にもとづいている。

賞が設立された1977年当時、海外や先鋭的な前衛の動向を反映して、美術館や新聞社等が主催する企画展にも、伝統的な形式では括りがたい作品が増えていた。また欧米の歴史的な作品群を招聘する海外展が盛んになり、絵画を探究する画家たちの活動領域が限られつつあった。そのような時代に創設された当賞は、50歳代前後

の中堅画家の支援を第一の目的としている。前述の選考基準もこのスタンスから出てくるのであり、そこに、1920年代のパリで未来派やダダイズムの渦中に身を投じた後、あらためて伝統的な絵画形式を選びなおした東郷の芸術観が反映されている。

このゆるやかな選考基準からは、あらゆるジャンルの作品が選出され得る。が、選考委員たちが賞名に冠された東郷の個性も配慮しながら討議する結果、受賞作の多くが、時代の空気に言及し、欧米

の現代絵画の造形言語を消化しつつも、ロマン主義の香りのする内面世界や生命感、あるいは古典的な調和、美、というような感覚を喚起するものとなっている。それらは、前衛から広がった挑発からも、また大衆文化やテクノロジーに浸されたりアリティィーからも一線を画し、個性的な受賞者たちをゆるやかに括る最大公約数だといえよう。しかも、受賞者たちの生年の大半は1930年前後のわずか5～6年間に集中している。画家を志す頃に終戦を迎え、国際化の中で欧米文化と避けがたく対峙しながらアイデンティティを確立した世代である。この四半世紀、彼らが各々の答えとして次々に開花させる美的世界に、本賞は東郷という個性が発する方向性を手がかりにして光をあててきたといえるだろう。

本賞は安田火災の社名変更に伴い、あらたに「損保ジャパン東郷青児美術館大賞」と改称した。第26回の受賞者、佐野ぬいひの受賞記念展は2004年秋に開催予定である。

本賞は安田火災の社名変更に伴い、あらたに「損保ジャパン東郷青児美術館大賞」と改称した。第26回の受賞者、佐野ぬいひの受賞記念展は2004年秋に開催予定である。

第1回 1978年 宮永岳彦 (1919 1987)	第2回 1979年 三尾公三 (1924 2000)	第3回 1980年 島田章三 (1933)	第4回 1981年 松樹路人 (1927)	第5回 1982年 小松崎邦雄 (1931 1992)
第6回 1983年 清川泰次 (1919 2000)	第7回 1984年 富岡惣一郎 (1922 1994)	第8回 1985年 大沼映夫 (1933)	第9回 1986年 田中稔之 (1928)	第10回 1987年 森 秀雄 (1935)
第11回 1988年 堂本尚郎 (1928)	第12回 1989年 渡辺豊重 (1931)	第13回 1990年 後藤よ志子 (1927 1992)	第14回 1991年 野田弘志 (1936)	第15回 1992年 佐々木豊 (1935)
第16回 1993年 前田常作 (1926)	第17回 1994年 馬越陽子 (1934)	第18回 1995年 奥谷 博 (1934)	第19回 1996年 林 敬二 (1933)	第20回 1997年 島田鮎子 (1934)
第21回 1998年 豊島弘尚 (1933)	第22回 1999年 山本 貞 (1934)	第23回 2000年 福本 章 (1932)	第24回 2001年 笠井誠一 (1932)	第25回 2002年 和田義彦 (1940)

歴代選考委員

- 第1回 東郷青児 植村鷹千代 嘉門安雄 東郷青児美術館館長
 第2回～第12回 植村鷹千代 嘉門安雄 三宅正太郎 同美術館館長
 第13回～第18回 植村鷹千代 嘉門安雄 同美術館館長
 第19回～第21回 植村鷹千代 嘉門安雄 三木多聞 陰里鐵郎 同美術館館長
 第22回～ 嘉門安雄 三木多聞 陰里鐵郎 米倉 守 同美術館館長 (以後現在まで)

2003年4月26日(土) 6月29日(日) 東郷青児美術館大賞25周年記念 25人の絵画展

1977年の制定以後毎年の中堅作家一人を表彰してきた大賞の25周年を記念する展覧会。受賞者の作品を一堂に展示し、賞の歩みをふりかえる。
月曜日休館(但し、5月5日は開館) 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで
入館料=一般500円(400円)/大・高生300円(200円)()内は前売および20名以上の団体料金/中・小生無料

2003年7月17日(木) 9月10日(水) 特別展 ルノー・コレクション フランス現代美術展

フランスの自動車メーカーであるルノー社が、1966年から1985年にかけて収集したフランスを中心とした現代美術を展示。
月曜日休館(但し、7月21日は開館) 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで
入館料=一般1000円(800円)/大・高生600円(500円)()内は前売および20名以上の団体料金/シルバー(65歳以上)800円/中・小生無料

2003年9月20日(土) 12月14日(日) 特別展 ゴッホと同時代の画家たち ゴッホと花 ‘ひまわりをめぐって

《ルーラン夫人》と2点の《ひまわり》を中心に、ゴッホと同時代の画家による「花」を描いた作品、約40点余が展示される。
月曜日休館(但し、10月13日、11月3日、11月24日は開館) 午前10時～午後6時(金曜日は午後8時まで) 入館は閉館の30分前まで
入館料=一般1000円(800円) 大・高生600円(500円)()内は前売および20名以上の団体料金/シルバー(65歳以上)800円/中・小生無料
10月1日(水)は損保ジャパンの「お客様感謝デー」として無料開館いたします。

2003年12月20日(土) 2004年1月17日(土) 所蔵作品展

損保ジャパン東郷青児美術館のコレクションの中から、その核である東郷青児の作品を中心として一堂に展示。
月曜日休館(但し1月12日は開館) 年末年始休館(12月27日～1月5日) 午前10時～午後6時 入館は5時30分まで
入館料=一般500円(400円)/大・高生300円(200円)()内は20名以上の団体料金/中・小生無料

損保ジャパン美術財団では、3月15日から4月20日までの選抜奨励展開催に先立ち、3月5日に全出品作(64作家64作品)を対象に各賞を決定する審査会が行われました。下記のとおり優秀な作品が選ばれ、3月14日に表彰式が開催されました。なお、審査員は宝木範義、寺坂公雄、瀧 梯三、ワンオトシヒコ、田中通孝、笠井誠一、和田義彦の各氏に財団関係者2名を加えた9名。

損保ジャパン美術賞
福井路可《昨日の風、明日の海》
アクリル・コラージュ
秀作賞
柏本龍太《sign》油彩
諏訪 敦《既視感》油彩・テンペラ
滝田一雄《室内風景》ミクストメディア



福井路可《昨日の風、明日の海》

選ばれた新進作家たち 第22回損保ジャパン美術財団選抜奨励展 入賞者報告

第26回損保ジャパン東郷青児美術館大賞は 佐野ぬい《二つの青のシネマ》に決定

昨年7月の館名変更に伴い名称も新たに変わった第26回損保ジャパン東郷青児美術館大賞は、佐野ぬいの《二つの青のシネマ》(油彩・キャンバス、194×130cm [120F])に決定いたしました。女性作家の受賞は後藤よ志子、馬越陽子、島田結子に続いて4人目となります。佐野は50年代の具象絵画から60年頃より抽象絵画へ転向し、「ダークブルーの系列」、70年代には「対比する青い面積の構図」、80年代

の「動く抽象地図」と、青を基調色とする心象風景を展開し、詩情性豊かな高い水準に到達しています。佐野は1932(昭和7)年青森県弘前市生まれ。女子美術大学を卒業後、「新制作協会」「女流画家協会」を中心に個展やグループ展などで精力的な制作活動を続け、一方母校である女子美術大学で後輩の指導にあたってきました。授賞式は2003年6月、受賞記念展は2004年秋に開催を予定しています。



佐野ぬい《二つの青のシネマ》

TOPICS

ゴッホと同時代の画家たち ゴッホと花 ‘ひまわりをめぐって

1888年8月、南フランスのアアルで、画家仲間たちとの共同生活を夢見ていたフィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890年)は、敬愛する画家ポール・ゴーギャンの部屋を飾るために、大きな壺にいけられた花束を描きました。ファン・ゴッホの代表作《ひまわり》です。1888年12月にゴーギャンと決別し、夢のアトリエが崩壊してしまった後、ファン・ゴッホは、《ひまわり》

を自作の《ルーラン夫人》と組み合わせ、やがて、《ルーラン夫人》を中央に2点の《ひまわり》を左右に並べる「三幅対」の構想を抱きます。2003年9月より開催する「ゴッホと花」展では、2点の《ひまわり》と《ルーラン夫人》が実際に並べられ、「三幅対」として展示されます。本展では、この3点を中心に、ファン・ゴッホと同時代の画家が描いた「花」をテ-

マにした作品が出品され、ファン・ゴッホにとって「花」、そして「ひまわり」はどのような意味を持っていたのか、そして、ファン・ゴッホがどのようにして「三幅対」というアイデアに至り、その一角を担うことで、静物画であり、そしてアトリエの装飾画であった《ひまわり》がどのような意味を持つようになったのか、その意図を探ります。

予告

ルノー・コレクション フランス現代美術展

アルマン、デュビュッフェ、ヴァザルリ、ミショー...

7月17日(木)~9月10日(水)

ルノーは1898年にフランスでレイ・ルノーにより創立され、1945年に国営化、1990年に株式会社となり、1996年に再度民営化され、現在では世界中に20の工場を抱えるヨーロッパ最大の自動車メーカーである。ルノーは1966年から1985年までの20年間、「今日の美術」というテーマで美術品収集活動を行なった。コミッション・アート(企業施設内の設置場所を特定して作家に委嘱した作品)がルノーと作家との共同作業で創作され、またルノーは同時代アートを積極的に購入し、作家たちの美術館での展覧会開催を支援するなど、戦後フランスの芸術活動を支えてきた。

ルノーは1967年に社内に作家を支援する

専門部署「芸術・産業研究所」を創設し、作家たちに自動車部品や制作場所を提供し、技術スタッフが技術指導をするなどの共同作業を行なった。1973年の本社屋建設を機に、ロビーや社員食堂、応接室などを飾る作品を作家たちに委嘱し、その後文化支援は支社や工場でも行われるようになった。1980年には「創作力推進財団」が設立され、ルノーの積極的な文化支援は1985年まで継続された。これらの作品はルノーの社屋内に常設展示されており、今回特別にまとまったかたちで日本で展示されることになった。

コレクションはフランス戦後の現代美術を中心として、スペイン出身のホアン・ミロとアントニ-

タビエス、チリ出身のシュルレアリストのロベルト・マッタ、1960年以降パリで隆盛した前衛芸術運動であるヌーヴォー・レアリストのアルマン、ニキ・ド・サン＝ファール、ジャン・ティンゲリー、そしてルノーの会社ロゴをデザインしたオブ・アートのヴィクトル・ヴァザルリ、ヴェネズエラ出身でキネティック・アートのジュサス・ラファエル・ソトなどの作品が含まれる。そしてジャン・デュビュッフェの大型の立体作品「青い壁」(350×710×110cm)がルノー本社ビル同様に会場入口に展示される。この他に東洋の書道から影響を受けたピエール・アレシンスキー、モンタージュ作品で著名な(グドムドゥル・)エロ、虹色の抽象作品のフリオール・バルク、詩人で根源的なカリグラフィーを追求したアンリ・ミショーの作品など、フランスで60年代から80年代にかけて中心となって活躍した13作家による約140点の作品で、フランス現代美術の歩みを紹介する。



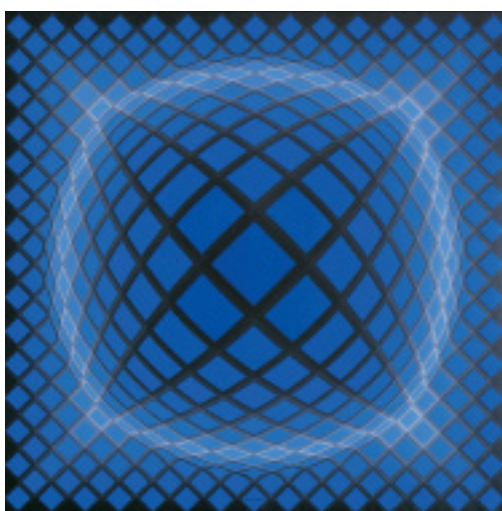
ロベルト・マッタ《60-Quand ?》1970年 139×154cm



アルマン《コンポジション》1974年 70×80cm



(グドムドゥル・エロ《マドンナ》1985年 98×62cm



ヴィクトル・ヴァザルリ《Vega Blue》1970年 160×160cm



ジャン・デュビュッフェ《別荘と人物の風景》1974年 195×130cm

展覧会記念シンポジウム

7月19日(土) 14:00~
損保ジャパン本社ビル2Fにて

パネラー: エリック・ド・シャセイ
イザック・ゴールドベルグ
ディディエ・スマン
クレール・スツリグ

*申込みは往復ハガキにて住所、氏名、年齢、電話番号
をお書きの上、美術館宛ご送付ください。

学芸員によるギャラリートーク

7月26日(土) 8月2日(土) 9日(土) 16日(土)
各14:00~ 美術館にて

All works © ADAGP, Paris & JVACS, Tokyo 2003

NEWS

お問い合わせ先
ハローダイヤル 03 5777 8600

財団法人 損保ジャパン美術財団 損保ジャパン東郷青児美術館

160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 損保ジャパン本社ビル42階
電話 03 3349 8081(代表) / ファックス 03 3349 8079
ホームページ = <http://www.sompo-japan.co.jp/museum/>
交通 = JR新宿駅西口、丸ノ内線新宿駅・西新宿駅、
大江戸線新宿西口駅より徒歩5分

損保ジャパン東郷青児美術館ニュース No.29

発行日 = 2003年4月18日
発行 = 財団法人損保ジャパン美術財団
損保ジャパン東郷青児美術館
製作 = 求龍堂 デザイン = 若林純子
印刷 = 凸版印刷株式会社

100
創設100周年記念事業として